

〈研究ノート〉

## 高齢者に関する人間観の基礎的検討

——社会福祉実践との関連における一考察——

坂 本 雅 俊

はじめに

現代社会における人間観との関係における高齢社会とは、高齢者と高齢に至るまでの成人の両者が協力し、互いにその違いを認めつつ主体的に生きることを認め合い、援助し合うことができる社会を築くための試練であると考えられないだろうか。このために、現代の我々のいまだ人間観が大いに問われていくことを意味している。現代の人間観を形づくり、また人間観により影響を受けている社会のなかで、社会福祉援助の利用者である高齢者とその家族は、互いにその生活場面で、自らの人間性を問う、あるいは問われるような福祉の問題に直面した時、悩み、葛藤し、そして迷う。

本文では、人権侵害（虐待など）を告発し、具体策を提言することが主旨ではない。司法などでは一般に、人権侵害の問題が発生してはじめてその対応策（実数調査、通報などのシステム構想、法整備、判例など）が検討される。しかし、社会福祉実践では生活レベルでいかに防止するかという「予防的援助<sup>1)</sup>」が一つの柱としてある。ここでは虐待やそれに準ずる事例をとおして、特に社会福祉援助における予防的見地から、その要因のひとつと思われる人間観に迫る意図ですすめたい。

そこで問題内容は、人権侵害や侵害とまで規定できない問題、また虐待もあればその概念には含まれない問題や虐待的状況の場合もある。たとえば、高齢者がその介護家族をいじめる場合もあり、それが虐待とも人権侵害とも言いえない範囲であったり、表現されえない状況で存在することもみられるのである。もちろん、いじめや虐

---

1) 厚生省（医療ソーシャルワーカー業務指針検討会1989年）、『医療ソーシャルワーカー業務指針検討会報告書』

指針の内容のうち、3、業務の方法の（5）問題の予測と計画的対応のところで「実際に問題が生じ、相談を受けてから業務を開始するのではなく、生活と傷病の状況から生ずる問題を予測し、予防的、計画的な対応を行うこと」とある。

待のような行為は高齢者と介護者間だけの現象ではない。児童への、ホームレスへの、また男女、職場などさまざまに存在する。

ここでは、生活上に福祉の問題があり、それを人間観を探る便宜上、65歳以上の高齢期の人々と64歳以下の人々に分けて、互いの考え、イメージでどう生活をすすめているかということについて考察していきたい。それは、子ども、青年から高齢者まで一人ひとりが人間観の形成者であるという視点にたつと、高齢者とその家族（夫、妻、娘、息子、嫁、孫など）・施設職員などとの間で葛藤が生ずるのは、そこに、互いの社会的立場、階層・階級、マスコミ文化、長寿化と介護者も高齢である、などの影響から、差別意識（エイジズム、セクシズムなど）やホスピタリズムを助長し、それぞれの役割を演じていかざるをえない顔が事例を通してみられるのである。

「敬老とじゃま者の思想」などの研究は多くなされてきており、まず高齢者と社会の関係を知る参考資料としながら、高齢者像の要因把握の基礎的検討を歴史的、自然科学的、社会的文化的の各面からまとめておきたい。そして、社会福祉実践と利用者との援助関係を見つめ、国民の福祉的問題への反応を知り、その反応がやがて社会的常識を形成するにいたる生活文化の視点を探り、援助者自身の人間観との関係についても考えたい。

仮に、人間観の意義を、人と人との関係における互いの考え・心情の相互作用であることからの熟考し行動する力であると理解した場合、人権に裏付けられた主体的生活者としての人間観の構築こそが、日本の現代社会に問われてきているものといえよう。そして検討を必要とされている人間観は、真の生活自立を構築する基底となるからにはほかならない。また、利用者・援助者をはじめとして、人間同志が互いを理解する心情としてかみ合わなければ、実現しえないものとも思われる。

高齢社会における生活者は、自らの一生を平均寿命の80年程と意識して人生設計を再構築していくことが必要である。そうしてこそ、高齢者に関する人権侵害はまさに自らの問題として認識されることとなり、自らの人間観を問う好機ともなるものと思われる。

## 1, 老人と高齢者の観点

「高齢者」と「老人」についてどうみてきたか考える時、そのイメージとしての用法に興味をひかれる言葉がある。それは「長生きはいいが、老いぼれたくない」と相談中に耳にすることである。なるほど、高齢者は年齢の高い者という字面で表されて

いるように、まさに長寿の者という意味であり、老人は、老化した人という意味で、ここには老いぼれたという意味を含んでいるのではないか、と考えられなくもない。

しかし社会福祉において、この高齢者と老人という言葉が、はっきりと社会科学的に定義され使い分けられているとは言えないようであるし、日常生活における用法もまた同様に曖昧に使われているものと言えよう。

長寿はめでたいが、老化はうとまれるという意味のこと、日本のこの2つの言葉について見るだけでも、このように2つの側面が含まれていると思われる。そして日常生活上では、なんらかの価値を含んでその生活場面ごとに微妙に使い分けられているのであろうが、概念として定義づけを考えようとする、曖昧であり、はっきり見えてこないのである。試論であるが、ここに日本の生活文化における、高齢者の存在の社会的な認識に対する、独自の人間観の生成されてくる土壌があることについて、検討されるべき観点・手掛りが存在するという仮説をたててみたい。

高齢者の日常生活からみえてくる人間観の糸口について、次の事例を通して、考えてみたい。

(事例1)、Aさん(89歳)は、独居の自宅で瀕死の衰弱状態で発見された。発見時の状況は、部屋には尿便がちらかり、ここ数ヵ月に入浴はもちろん、食事もほそぼそと買い置きでつないでいた状況であった。同市内の近隣に別々の所帯で住む実の息子と娘は、母(A)について3ヵ月前位まではかろうじてでも歩けていたし、急に歩けなくなったという状況を知らなかったから、というのが放置していた理由であった。近所の通報で緊急入院となったが、危機状態を脱して、脱水状況も回復した。行政と息子、娘、病院とで話し合いをもったが、結果、独居の継続はもちろん、放置の状況の再発が考えられることから、緊急のホーム入所の措置決定がされ、1月足らずの入院でホームへ入所された。尿便にまみれ、食べるものもなく、室内に異臭がただよい、畳は朽ちていた生活状況は、ここ数ヵ月のみに起こった生活状況のものではないことを物語っていた。息子、娘は通常の家庭生活(いわゆる心身ともに健常な)を送っているが、親を放置しておいたことについて、すいませんと関係者にあやまるばかりで、特にひどいことを行ったという認識の言葉はなかったし、また、Aさん自身もその後も息子に普通に話しかけられており、根にもった様子もみられない。

この事例で印象的なことは、放置しておくことの意味が、「うっかり」とか「忙しいから」などで互いにすませれるという点である。また、援助者もいきなり人権問題だとして糾弾に及ばない点である。そのためこうした介護についての日常にある考え方においては、直接の暴力などと比べても同等の暴力に値する行為であるとの認識は

全体的に薄く、これに類する高齢者との処遇関係は他の家族の日常生活のなかにも存在するであろうことが容易に予想できるのである。

はじめに、この「互いの考え」は、利用者（高齢者とその家族）の主体性を育むという意味での社会福祉実践を実現する上で、支障となるのではとの援助者としての不安がある。この不安とは、利用者の主体的生活からわきおこる生への実感をこうした人間（ここでは親子）関係のなかからしか実現しえていないのではないかという不安である。この探究は、これまで価値観の違いとされてきた「人間観」について問うことにつながり、利用者の人間観が社会福祉実践とどう関係しているかが問われる問題とも考える。高齢者の前向きに生きようとするそのものを否定するような日常生活のなかの実情は、高齢者自身の価値観や援助者自身の処遇へのイメージの在り方によっても導かれ、支えられているとも考えられるのである。それは単に、互いの人の良し悪しの問題や、心理的な防衛機制であるとか、家族と高齢者の関係が単に悪いからとかの理由でもあるが、そこにいたるまでの要因が存在するのである。なぜなら、互いの気持ちが通じていると思っても、現実の生活ではその気持ちが具体的な行動となつてなしない。その場合に心理的合理化として、「なんらかの社会的理由があるのだから仕方ない」とする互いの考え方と、そこに援助者自身もあるべき人間観をイメージしえていないのではないかという点にこそ、問題の糸口があると思われるからだ。このことは、筆者が高齢者とその家族の相談を目の当たりにし、それが家族同志の好き嫌いのレベルだけでは理解しきれない、人間の気持ちを動かす前段階の観点に、なんらかの社会的文化的な因子が働いているものと考えらるからである。

こうした観点は、新ゴールドプランなどが進行中の現在に対して、ある問題視点を提起してくれている。

それは、人間同志が生活をする場合、その言動の一つの基準側面となっているのが、人間観であるとの視点である。人間が人間をどうみているか、ということは、その観察によりどういう判断を下すかということと関連して、行動にもつながっているとみなすのである。事例を検討するにあたって、このことを踏まえてすすめたい。

事例にでてくる実の息子と娘は、平均的な通常の世界生活を送っている人である。問題となる点は、利用者の生活問題について、単に互いの間で社会的に抑圧し押し縮めていただけという点である。仮にこれを虐待とみなすならば、高齢者への無視・放任の問題と提言もできよう。しかし、それは確かに現象を照らしてはいるが、社会福祉実践の視点からすると、利用者の生活をすすめる上でのイメージの在り方も見つめてみたい。たとえば互いにもっている老化へのマイナスのイメージ<sup>2)</sup>の影響も考えら

える。法制度では、マイナスイメージそのものを論議して軽減・解消する影響力は少なく、社会の論点からできるだけ切り離し、論点の壇上から引きずり下ろしているだけではなかったか、という疑問もある。だからこそ、そうした思いは互いの個人のなかに押し込められたまま残り、時には事例のように、無視や放任等の形で日常生活上に表出してくるのではなからうか。

生活上の押し縮められた互いの思いは、社会的に論議により深められ発展解消する機会をもたないため、社会の暗部に埋もれて人目につかないところで両者が我慢することで、家族の絆と生の実感の喪失を防ごうとしているのであるという理解の仕方でもできよう。

これでは、福祉制度の量と質が増しても、在宅へのシフト政策が進んでも、肝腎の利用者にはちっとも嬉しくも楽しくもなく、生活の充実も歪んだ形でしかもちえないのではあるまいか。正に、利用者が主体的に生きることを援助する社会福祉実践の根幹を揺るがすような部分が、そのまま取り残されてきているとしかいえない。

このことは社会福祉実践の現実から、日常生活における家族間が、お互いををどう観るかという論議をすすめる上での課題である。

## 2, 人間観の背景

現代の生活文化における高齢者への人間観はどのようにできあがってきたかということについて、ここではその歴史的、自然科学的、そして社会的文化的な事実関連を概観して考えてみたい。まずはじめに、歴史的にはどういう事実がみられるのかについてみたい。

歴史研究<sup>3)</sup>を参照にまとめると、高齢者に関する人間観は、敬老の思想、優老の礼

2) 生活科学調査会編、『老後問題の研究』ドメス出版, 10 p, 1983年

「財力や権力をにぎれる老人は社会の支配層に位置づいていますが、そのような力を何らもたない老人の多くは、逆に社会生活から、じゃま者にされていきます。つまり人間を労働力としてしか見ない半封建的、資本主義の社会ではこの法則は、きびしい現実となってあらわれています。ひと口に老人といっても、すでにそこには階層・階級によってちがいがいるということもわかります。」

3) 橋 覚勝、『老年学』誠信書房, から私の興味に添わせて理解した範囲を引用し以下のよう

にまとめた。4～27, 150～170, 221～248頁, 1971年

「原始民族についてみると、一般に多くの未開民族においては、長老に対する敬愛の念は共通にもっているもののようであるが、種族により、またその文化の段階によって、種の保存・信仰・習慣・虐待としてなどのさまざまな理由のために、老人を殺害・遺老・また自殺行為にみちびく場合もあった。西欧では、近世に入って、若干科学的な老化原因の考察がなされた。そして17, 18世紀の近代科学の興隆の時代へとなり、19世紀は老衰の発見があっ

儀、養老の実践を保持しつつも、科学的な実証的傾向へと変わったものと思われる。そしてその年代の人間観の影響などにより、時には肯定的、否定的に考えられたり、またその様相は優老・敬老的、同情・哀れみの、悲観・侮蔑的など多様に変化してきたことが伺える。

次に自然科学的な事実から老化を概観すると「人間が成熟したのちに、時間とともに全身的な衰退変化を示すことを老化と呼ぶ。老化の特徴は、身体の細胞の量が減り、臓器が萎縮すること、さらにそれによって生理的な機能が低下していく。この変化はもとにもどらない不可逆性を持ち、個人差があり、老化は生存に不利な条件を生み出す。しかし行動は緩慢になるが、総合的な知的機能は衰えない<sup>4)</sup>。」とされる。また加齢による変化は、たとえばしわと白髪といった身体的変化、それ自体が高齢者に関する人間観の形成の外面的な要因となっているものもあると考えられる。こうした加齢による変化は、生物すべてにおこる自然的事実であるといえる。

歴史的事実とあわせてみると、事実の証明のみを重視する科学的な実証的傾向への変化は、老人（高齢者）の容姿のイメージに対し、生存に不利な条件をもった者という特徴だけが一層に浮きだたされてしまい、そこにマイナスの価値を重ねた見方のあることを考慮しておかなければならないであろう。このような自然科学的な観点は「高齢者は単に加齢により生存に不利な条件をもった人間」であるとの人間観（老年観）を強調する要因をもっていることが考えられ、さらには社会的文化的に形成される高齢者への人間観にも少なからぬ影響のあることも否定できないと考える。

以上がいつまで、現代の高齢者に対する人間観は、歴史的、自然科学的な動かし難い事実のもとに存在していることを明らかにしてきた。ではこの背景のもとに、現代では高齢者に関連して、どういう社会的文化的な意識がもたれているのかみたい。

年金、健康保健、福祉の諸施策、そして病院や福祉施設の社会保障や社会福祉が整備されるということを臨界線としてみると、明治から大正にかけては、依然、老後を跡取りに託す心情をもっていた時代であったといっても差つかえないであろう。平

---

↘たとされ、人間を老いと死からまもることの考察がはじまり、aging という概念が新しく登場した。日本では、老人への呪的属性に対する畏敬があった。史実以後では、敬老の思想、優老の礼儀、養老の実践が行われた。近世では、敬老主義も道学的な観念論より脱して、社会に一般化し、それを基底として科学的に照射された実証的傾向となった。以後明治大正においても、その理念はそのまうけつがれていると考えられる。」このように人類はその種族が減びないための知恵・手段として、また信仰、習慣などの理由で、その文化に応じて敬老、優老だけでなく、虐待、遺老、殺害なども繰り返してきたとされる。そして、現在でもさまざまな理由から老人否定の観点は存在するものと思われる。

4) 奈倉道隆、『老年期の心とからだ』中央法規出版、4～6、37～38頁、1990年

和憲法制定後、「老後」に関していえば、専業主婦など年金制度の恩恵が少なくしか受けられず、男性より長寿である、家庭内の介護の担い手とされた、などの理由から、老後の問題は女性の問題でもあるといわれてきた。そしてさらに今では、70歳の子が90歳代の親の介護を、孫が両親と祖父母の扶養・介護をする場合もみられるようになった。長寿化により、経済的扶養はもちろん、精神的な安定への扶養や介護の扶養などもますます重く長期にわたるようになり、老親扶養の在り方も変容してきている。さらに詳細な老後の定義についてはここでは触れずにおきたい。高齢者に関する人間観を探る意味から、一応、65歳を境に分け、高齢者に関連した意識はどういうものなのかみたい。

はじめに、「老後における望ましい家族とのつきあい方」60歳以上の男女への調査<sup>5)</sup>では、国際比較によると、子どもや孫とはいつも一緒に生活できるのがよいと考えている高齢者の割合が日本では約54%であり、ドイツ約15%、アメリカ約3%、イギリス約4%であり、欧米と対照的である。また、日本の同居率は年々低下しているものの、「子どもと同居している65歳以上の高齢者の割合（1994年）」は約55%（欧米は20%以下）である<sup>6)</sup>。そして老親扶養についての考え方は、「施設・制度の不備ゆえ止むをえない」がここ10年間で10%から30%へと増加している<sup>7)</sup>。

このデータは日本の生活文化の一面を表していると考ええる。子は老親扶養についての考え方で、当たり前前の義務と考えているのは減少しつつも30%（1994年）を示しており<sup>8)</sup>、高齢者が子と一緒に居たいと思う気持ちに添う側面である。しかし、高齢者が同居希望の気持ちをもっているからといって、現実には高齢者が無理にでも同居を迫るかといえばそうではないであろう。それは、日本人の意思決定の傾向が「決定は家族などの全体を維持するためのものであり、時には個人の感情は抑圧し、あくまで場の均衡を保とうとするもの<sup>9)</sup>」であり、これに対して西欧人のそれは「個人にとって善なるもの、有益なるものが決定するための最優先の条件であり、選択結果への個人の尊重にこそ最高の価値があるもの<sup>10)</sup>」との特徴がみられることなどからも伺える。

5) 調査対象は、各国とも60歳以上の男女。出典：総務庁長官官房老人対策室「老人の生活と意識に関する国際比較調査」（1990年）『平成8年版厚生白書』65頁。

6) 「子どもと同居している65歳以上の高齢者の割合」（『平成8年版厚生白書』64頁）

7) 対象者は50歳未満の有配偶女子。「その他、無回答、わからない」は除く。出典毎日新聞人口問題調査会「新しい家族像を求めて：第22回全国家族計画世論調査」（1994年）『平成8年版厚生白書』68頁。

8) 同上、厚生白書68頁より。

9) 今井章子、「ソーシャルワーク研究（そのⅢ）」園田学園女子大学論文集15、9、11、12頁1980年。

10) 同上、「ソーシャルワーク研究」12頁、1980年。

そして、同居することと面倒をみること、みてもらうこととの関係は別けて考えている傾向のようである。特に老親への介護については、「施設・制度の不備への不満」の調査結果がここ数年高まっているのはそのためであろう。同居という意味からは、老後を託して安心、託されて本望という一致がみられないのである。同居していても面倒みるのは別問題との意識がみられる。その面倒の内容は経済面ももちろんであるが、介護面への不安が高齢者、家族ともに一層高いのが特徴である<sup>11)</sup>。

こうしたことから、日本の親の扶養における高齢者への観点は、子として面倒みるのはある程度は当然の義務かもしれないと思うが、現実の生活では介護面、経済面などの社会からの援助がどうしても必要、とする考え方に裏付けられた見方ができよう。また高齢者からの観点は、同居はしたいが家族全体のことを考えると強くはよう言わない。子どもに面倒をみてもらいたいが、迷惑はかけたくない。老後の不安は体のことと経済のことなどが高い数値となっている。

こうしたデータは、心身健全な老親とその子や孫などの家族は、規範にとらわれずに、折衷案として、ともに自立し、かつ援助し合える生活を摸索していることを裏付けている。しかし、家族が心身に疾病・障害を負うなど、なんらかの生活障害に直面した場合に、扶養する家族には、社会的立場における効率主義、生活予備力の希薄さ、社会資源の発達不足などから、折衷案を通しつづけたいができない葛藤が生まれ、扶養される家族もそのことを慮って葛藤が生まれるものと思う。その時の両者の判断・決断・行動に影響する大切な要因が人間観であろう、と考えるのである。

まとめてみると、高齢者に関連した人間観を探る上での手掛りとして、歴史の示す通り、明治、大正に続いてきた「観念論から脱した敬老思想」を基底に残したままの生活上に、社会システムでは欧米の知識・技術の合理主義を移入し受け入れた。ここに「生活における場の均衡を保とうとする敬老思想をそなえた心情」と「欧米の個を尊重する合理的な社会システムに合わせざるをえない心情」の両方を合わせもつ日本の生活文化ともいえるひとつの側面が育ってきたと見てとれる。

昭和20年代以降の社会保障、社会福祉の、全国民を対象とした法制度の設置は、生活の特に貧困の社会的要因について、消極的意味においてはあるが救済する意向を示したものとえられる。いわゆる社会権の法的制定に関してであるが、現実には上記のような生活文化における心情の側面を背景として社会福祉援助そのものにつながら

11) 対象は全国に居住する30歳以上60歳未満の男女2277人。出典総理府「高齢期の生活イメージに関する世論調査」(1993年)『平成8年版厚生白書』74頁。



ない場合もある。たとえば、介護サービスの援助、福祉施設・制度の利用への潜在的欲求はあるが意思表示はなされないとか、申請へ至るアクセスの前段階への支援に関する、いわゆる自由権的内容に含まれるような生活の事象であっても、社会権的な積極的介入（援助）の法的視点を必要としている生活者の心情が社会福祉実践を通して見受けられる場合がある。それは、「生活の場の均衡を保とうとする敬老の心情」と「欧米の個を尊重する合理的な社会システムに合わせざるをえない心情」の狭間にあり、自らの人間観を省みる葛藤の影響を意味しているとも考えられる。そうした視点も人間観を探究することで明らかにしていく必要のある課題としておきたい。こうした社会的文化的な事実、さらに、長寿化の進行、階級・階層の存在、教育、マスコミ文化などの生活の基幹的部分からの影響を受けていると思うが、高齢者に関する日本の生活文化をとらえるということからすると、生活に関連したさらに多くの他の領域からの接近を必要としている。

### 3、高齢者の主体性へ働き掛ける社会福祉実践とは

高齢者虐待を減らすには、について「社会的支援システムが未整備のまま多くの家族は介護の負担に耐えてきた。この構造が虐待を生む最大の要因である<sup>12)</sup>」との意見がある。関連して、ここでは、高齢者自身はどう思っているのかということの考察をとおして、高齢者主体の視点についてみていきたい。

（事例2）、Bさんは夫婦二人暮らし。実の息子一家が近所に在住。夫は戦後まもなく仕事で左下腿を失い義足の生活であり、最近、脳梗塞のために右半身が徐々に不自由となり寝たきり状態となっていた。妻は微小性脳梗塞のため、軽度の痴呆がある。そうした二人の生活の年金は合わせて16万円程であり、住居の賃貸料と光熱費・食費が主な支出であった。そして、夫婦は夏の熱さで脱水症状となり、息子夫婦へも相談されたが、なかなか無理もいえないと思い民生委員に相談された。そして、最終

12) 萩原清子、「わが国における高齢者虐待の発生と福祉援助の課題—高齢者処遇研究会」実態調査から—月刊地域福祉情報、ジャパン通信社、1994年

高齢者虐待を減らすためには、「従来、社会的・公的支援制度を前提とした在宅介護と、私的ケアである家族介護とが混同され、結果として社会的支援システムが未整備のまま多くの家族は介護の負担に耐えてきた。この構造が虐待を生む最大の要因である。したがってこれからは、家族介護と在宅介護は明確に区別され、家族介護は公的介護の補完と位置付ける「介護の社会化」こそ虐待を減らす方向である」また、「高齢者虐待を起こさないためには、高齢者と家族介護者それぞれの個人としての人権を擁護する視点が必要である」と述べられている。

的には入院をみずから希望され緊急避難的に入院された。入院中まもなくして、Bさんの妻が孫に年金通帳を渡したところ、息子夫婦がその年金を管理するようになったことが、病院への支払いが滞ったことから分った。

息子夫婦と病院で話し合いの機会をもった。結果は、①Bさん夫婦の病院への支払いは息子が年金から払うことを約束。②Bさん夫婦からの「年金通帳を返して欲しい」という意思を代弁。そして、③Bさん夫婦は隠居として賃貸に移り住んでいたことなどがわかった。この結果の①②を伝えるとBさんは「あんまりきつくいうても仕方ないな」と話され、息子は、施設に居てもらおうと安心、それしか仕方がない、との感想であった。

客観的には、家族内における金銭の搾取に準ずる問題であると思われる。高齢者自身にとってみると、息子への理屈抜きの愛情と、その子との関係の維持、疾病を機に増幅された自らの老化への失望感が伝わってくる。では冒頭のように、社会的支援システムが完全に整備されて、家族は介護の負担に耐えなくてもよい状況になれば事例のような現象はなくなるのであろうか。

これに触れて、高齢の親とその子について、高齢者と高齢にいたるまでの成人とに分けて考えると、高齢者自身の思いと高齢にいたるまでの成人の思いが、互いを理解する心情として特に生活面でうまくかみ合っていないのではないか、その原因は互いの人間観の違いに要因があるのではと考える。そして、そこに働きかけるのも援助者の人間観を基本とした知識・技術などである。

いじめや虐待に準ずるような行為は、高齢者と介護者間だけにみられる現象ではない。児童への、女性への、ホームレスへのなど、また夫婦間、保母と園児間、男女間、職場の人間間など、そして場所は保育園から学校、会社、家庭、福祉関係施設など多くでみられる。

もちろん違法な逸脱的社会行為などは、各領域・分野ごとに定義と原因研究がなされ、法制度により細かな対応が必要であらう。ただ、共通していることは、人間同志における力の差（たとえば、体力、腕力、能力、財力、権力、知力など）がはじめにあり、力の強い方になんらかの抑圧の要因がふりかかった時に、本人の「人間観」のうちにある偏見や差別などの心情が、身近にいる弱い立場の者に影響するのではないかということである。この抑圧の種類のなかの一つに社会的支援システムの未整備の状況も含まれるのであろう。

もう少しみると、Bさんの心情はなぜ「仕方ない」と感じて、その言葉が表出されているのか。その主因は、ひとことという実の息子とその家族との関係においての

むなしさに対してであろう。その要因となっているのは、老化と疾病の避けられない自然的な事実への辛さ、息子の自分に対する見方（人間観）とそれにもとづく関係者の処遇の在り方への不満などであると考えられる。もちろんこれだけが要因のすべてだとする短絡はできないものの、少なくとも、Bさんの心情にあるひとつの真実の部分であることは間違いない。

先述のように、社会福祉の諸制度の量と質の充実がすすんでも、それらを利用する利用者（本人とその家族）が「仕方ない」との心情で日々を送るのでは、社会福祉実践の目的としての人間生活における主体的契機への働きかけの実現はなしえていないということは明白である。

西欧文化における古代の観念論的老年観から科学的な老年観への変化は、高齢者が畏敬をもった特殊な存在ではなく、老化により誰もが一定の心身の変化をたどることの客観性をもって明らかにされてきたところである。しかし、科学的視点をもつ近代社会においても、高齢者に関する人間観はその社会の文化の影響を受けて、その特徴は敬老傾向や虐待傾向になる等さまざまであった。

われわれの人間観は、そこに生活する人間の社会的文化的な考え方によって常に形成され続けているといってもよい。そうして、社会的文化的な考え方は、歴史的、自然科学的な事実のもと、地球のいろいろな環境に適応する上での人類の長いこれまでの経験と経過によって位置づけられた独自の生活文化とも呼べるものを形づくってきたものと思われる。援助者もいきなり人権主張から援助介入するよりも、利用者との生活のイメージ調整をすすめる方が現実には馴染んでいくと受けとれる。また、この生活文化の視点を抜きには、社会福祉援助の知識・技能は発揮できないものとも考えられるのである。

ここでの高齢者と家族の考え方の合意と相違は、単に家族間の人間関係のよしあしにのみ左右されているのではなく、このように独自の生活文化の事実に影響された考え方にも原因がみられるのである。そして、福祉が生活文化を対象とする所以は、社会的文化的な考え方における福祉問題を発見することから出発し、人間観に関連した分析視点を通して、自然環境における暮らし、他国他民族との暮らし、他の動植物との暮らし、への在り方を社会に対して問題提起することに通じていると考えるからにはほかならない。

高齢者に関する人間観の創造に影響する社会的文化的な考え方に関して、次の課題としては「国際化と人権の諸問題」について、生活文化における国際化や、日本の生活様式を踏まえた社会権・自由権の独自のとらえ方などの観点から考えたい。

### 主要参考文献・図書

- 奈倉道隆,『老年期の心とからだ』中央法規出版,1990年
- 硯川眞旬他,『老人の生活相談・生活指導』中央法規出版,1990年
- ジョセフ・J・コスタ編,『老人虐待』中田智恵海訳,海声社,1988年
- 橘 覚勝,『老年学』誠信書房,1971年
- 折茂 肇編纂,『新老年学』東京大学出版会,1992年
- 井上勝也他,『新版老年心理学』朝倉書店,1993年
- 会田雄次,『決断の条件』新潮選書,1993年
- 生活科学調査会編,『老後問題の研究』ドメス出版,1983年
- 柴田 博他,『老年学入門』川島書店
- 厚生白書平成8年版
- 『現代福祉学レキシコン』雄山閣,1993年

### 主要参考論文

- 今井章子,「ソーシャルワーク研究(そのⅠⅡⅢ)」園田学園女子大学論文集,1978年1980年
- 萩原清子,「わが国における高齢者虐待の発生と福祉援助の課題—高齢者処遇研究会」実態調査から—」月刊地域福祉情報,ジャパン通信社,1994年
- 藤田雅子,「老人はどう変わったか」現代のエスプリ341,1995年
- 佐藤 進,「社会福祉と法律学11—高齢者と社会福祉サービスの法と行政—」月刊福祉,1981年11月号
- 宮本義信,「文化論を導入した「日本的」ケースワーク研究の方法と課題」桃山学院大学社会学論集55~95頁,1989年